



■柿と銀杏—畏友—

今年の夏は酷暑となり秋以降も暑さが続いたせい、柿が不作とのこと。冬の風物詩となっている干し柿も、秋以降の高温のせいで腐ってしまい例年ほどの出荷量が見込めないという報道もよく耳にします。ところで、“柿”と聞くと頭に浮かぶのは

「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」

という俳句ではないでしょうか。一柿を食べていたら、法隆寺の鐘が鳴った。柿の味。鐘の音。秋のひんやりした空気。いろいろな感覚が伝わってきます。(NHK for School)

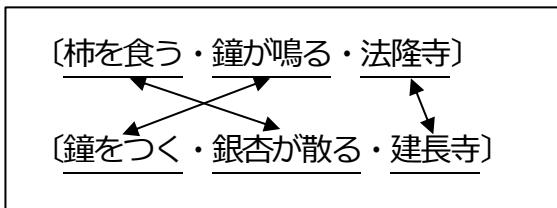
この句は、1895年11月に正岡子規が故郷松山から東京に向かう道中の奈良県で詠んだ句といわれています。ただ、実際には法隆寺を眼前にしてはいなかったといわれています。

一方、この俳句をご存じでしょうか。

「鐘つけば 銀杏ちるなり 建長寺」

建長寺は神奈川県鎌倉市にある古刹（古いお寺）ですが、どこか「柿くへば〜」の句と似ていますね。子規の句を真似してつくったのではないかという感じもします。

この句は夏目漱石が詠んだ句で、1895年9月につくられています。つまり「鐘つけば〜」の句の方が「柿食へば〜」の句よりも2か月ほど前につくられています。ということは、子規の方が真似したと考えることもできますね。



子規と漱石は同じ年で東京大学の同期でもあります。2人はお互いの才能を認め合う生涯の友となります。その後、子規は肺結核を患い大学を中退、新聞記者となりますが、療養のため松山に帰郷します。子規は、漱石の勧めもあり、中学教師として松山に赴任していた漱石の下宿先である愚陀仏庵で52日間を過ごします。「柿くへば〜」の句は、子規が松山を発ち東京へと向かう道中でのものです。漱石の「鐘つけば〜」の句を意識したいわば「返歌」としての句ともいえます。漱石の句は、意外性がないなど評価が低かったといわれていますが、子規としては松山での療養を勧めてくれた漱石への感謝の意を込めながらも、俳句界の第一人者としての矜持から「君、こういう具合に詠んだ方がよりいい句になるよ」と言っているようにも思えます。そこには、子規と漱石とが互いをリスペクトしながら、さらなる高みを目指していこうという畏友（尊敬している友人）の関係性を垣間見ることができます。

柿と銀杏—秋深くなると二人のことを思い浮かべます。



▲本校グラウンド西側の銀杏



▲本校体育館に向かう坂道の銀杏